

あとがき

表現の意図を説明することは、読む人の想像や作品の余白を狭めてしまうのではないかと思っていました。

一方で、本作は0歳から楽しめるように作っているため、一見ただけでは伝わりにくい部分もあります。

そうした中で、意図を伝えることで余白が閉じるのではなく、むしろ人それぞれの経験や価値観によって広がることにも気づきました。

そこで、このあとがきでは本作が生まれた背景や想い、感じていることの一部を書いておこうと思います。

本作は0歳から楽しめる絵本です。まだ言葉がわからない頃は、色や形、「ムニムニ」や「にっこり」というオノマトペ、読み手との触れ合いを通して感覚的に楽しんでもらえたら嬉しいです。

この絵本のはじまりは、子どもをあやしながら歌っていた歌でした。ムニムニしながら歌うと笑ってくれる。その時間を絵本にしてみたいと思い、パソコンで作ってプリントアウトし、糊でペタペタと冊子にして家で子どもと楽しんでいました。

最初から何かを伝えるために生まれたわけではなく、子どもと一緒に笑う時間から始まり、少しずつ想いを込めていきました。

当時はコロナ禍で、人と人との間に距離が生まれていました。その中で改めて触れ合うことの大切さを感じるようになりました。幼い頃の触れ合いが子どもの成長や人と関わるための土台になること、そして大人になってからも大切であることを少しずつ知りました。

また、会って顔を合わせること、言葉を交わすこと、一緒に時間を過ごすこと。そうしたことも触れ合いの一つなのだと思うようになりました。

絵本の後半に出てくる林檎は知恵を表すものとして描いています。「ふたつに分ける方法」という知恵が自分の中にもあることを思い出してもらえたらと置きました。この描写には、広島で生まれ育ったことや当時の社会情勢も、少なからず関係していると思います。

同じように、チューリップや猫、そのほかの描写にも、それぞれの想いを込めています。

この絵本の中では、ムニムニする側とされる側がいます。私たちはみんな、誰かからいろいろなものを受け取りながら育ってきました。

成長した今も、誰かから受け取ったり、誰かに渡したりしています。受け取る側も渡す側も、どちらも自分の中にあるのだと思います。

あらためて絵本を見返す中で、「ムニムニ」とは「今より少しでも良くしたい」という気持ちから生まれる試行錯誤のようなことではないかと思うようになりました。

身近な人たちも、名前も知らない誰かも、先人たちも、それぞれに試行錯誤を重ねてきました。今の私たちの暮らしも、そうした積み重ねの上にあるのだとあらためて感じました。

この絵本を届けることで、身近な人や日々過ごしている環境への感じ方が少し変わり、広がっていく先に何かが変わる可能性はあるのではないかな。そう思うようになりました。

それは、今を生きる私たちの小さな行動が、子どもたちやその先の世代へとつながっていくことでもあります。この絵本も、私がこれまでに受け取ってきたものを自分なりの形にし、次へ手渡そうとする一つの試みです。

最初に糊でペタペタ作った絵本から、5年ほどたちました。はじめてのことばかりの中、ここまでたくさんの人に話を聞いてもらい、力を貸していただきながら進んできました。本当にありがとうございます。

今こうして届けられることで、まずは感覚的に楽しんでもらい、その人の成長とともに違う形で開いていく絵本になれば嬉しいです。

これからも、うまくいく日もうまくいかない日もあります。

そんな毎日の中で、今日も明日もにっこりに向かって、ムニムニしていくのだと思います。

タナカ